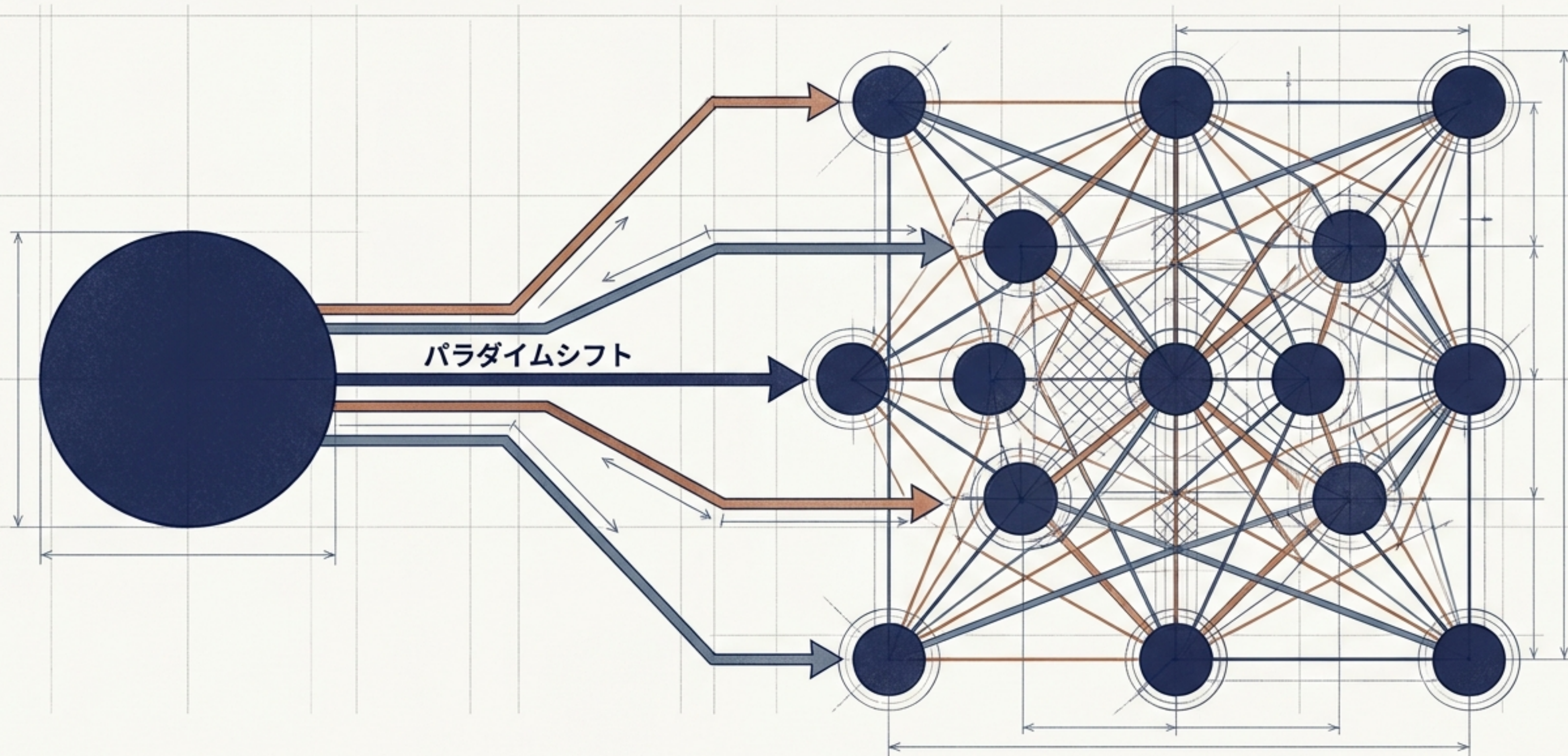


点から網へ：知財AIがもたらす特許戦略のパラダイムシフト

知財・情報フェア2025-2026 比較分析から読み解く、次世代AI特許網構築の最前線



調査基準日: 2026年9月21日

エグゼクティブ・サマリー

本レポートが示す、1年間で起きた3つの劇的な変化



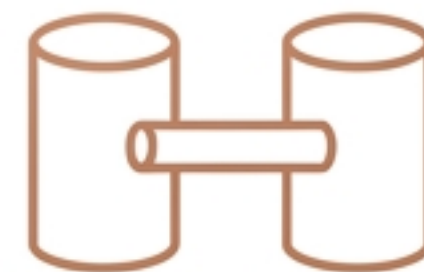
工程の自動化から網の設計へ

単一特許の明細書作成・処理（点）から、1件の基本特許から周辺特許群を自動生成する「網（面）の設計」時代へ突入。



「守る」から「使う」へ

権利化までの支援だけでなく、他社製品との対比（イ号調査）や無効審判など、権利活用・他社牽制（Offense）フェーズへのAI適用が急拡大。



基盤の進化と標準化（MCP）

汎用LLMと特許データベースを直接接続するMCP（Model Context Protocol）が標準化。対話型インターフェース上で戦略構築の往復作業が完結。

フェア規模と熱量の変化：需要を上回る供給の爆発

来場者数（需要）

15,207名 → 15,502名

+2%



出展者数（プレイヤー）

158社 → 171社

+8%



出展者プレゼンテーマ数
（ソリューション）

86テーマ → 108テーマ

+26%



キー・インサイト：AI系サービスの参入増により競争が激化。1社が複数の切り口で高度なソリューションを訴求するフェーズへ移行した。

対象領域の定義：特許網構築の「コア」への到達

隣接領域（2025年までの主戦場）

個別工程の支援

- ・ 発明発掘・創出
- ・ クレーム・明細書作成
- ・ OA対応
- ・ クリアランス調査
- ・ ポートフォリオ分析

直接領域（2026年、中心を射抜く）

特許網（ポートフォリオ）の構築そのもの

- ・ 基本特許＋周辺特許群の自動生成
- ・ 面的な技術領域の囲い込み



The Paradigm Shift Matrix (2025 vs 2026)

アプローチ (Approach)	・ 単一タスクの効率化（点）	・ 複数特許による領域設計（網・面）
フォーカス (Focus)	・ 権利化・守り（Defense）	・ 権利活用・他社牽制・攻め（Offense）
技術基盤 (Tech Foundation)	・ 汎用LLMの各ツールへの組み込み	・ MCP直結・特許特化型ローカルLLM
キープレイヤーの動き	・ 検索・要約・文書作成機能の競い合い	・ 複数AIの合議、製品情報との対比分析

結論：単なる「書くAI」から、戦略を「使う・創るAI」への完全なパラダイムシフト。

直接該当の登場：自動化された網の生成

AI Samurai「発明ホコタテ」(2026年出展告知)



実機検証の必要性：生成された周辺特許群のクレーム粒度や、先行技術調査との連動精度は、依然として『人の目』による確認が必須となる。

フロンティアの拡張：守り（Defense）から攻め（Offense）へ

権利化までの支援から、取得後の活用・他社牽制への拡張

Smart-IP：「Offenseモード」投入

イ号候補検索AI、対比AIにより、自社特許と他社製品を直接対比し実効性を検証。

Defense（防衛・権利化）

2025年の主戦場：明細書作成、OA対応

Offense（攻撃・牽制・活用）

2026年の新たな主戦場

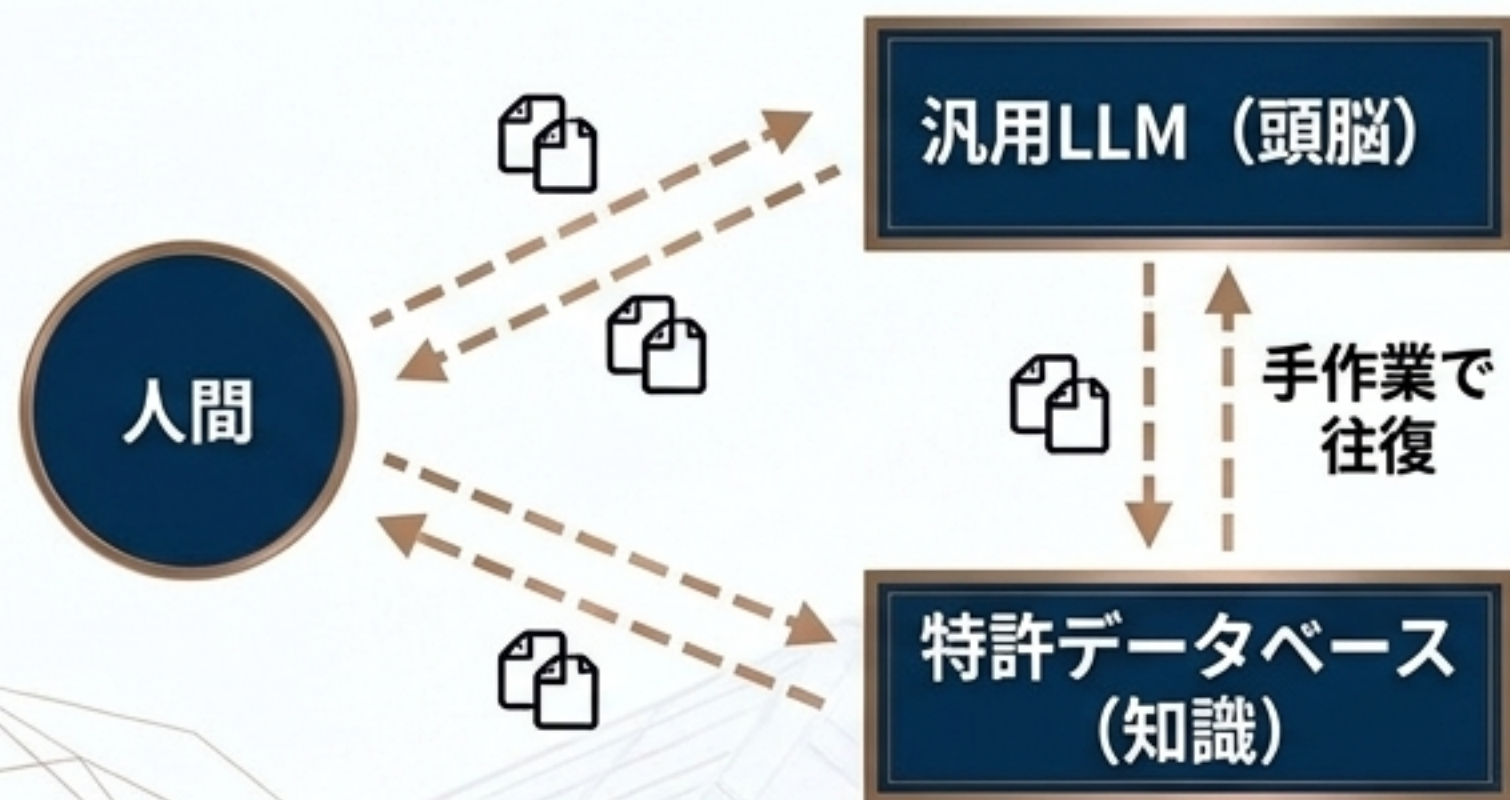
aiip：他社の網を崩す作業をカバー

情報提供、異議申立、無効審判までを一つのSaaSで統合。

▶ **インサイト**：構築した特許網が「実際に他社に届いているか」を低コストで検証・補修するサイクルの現実化。

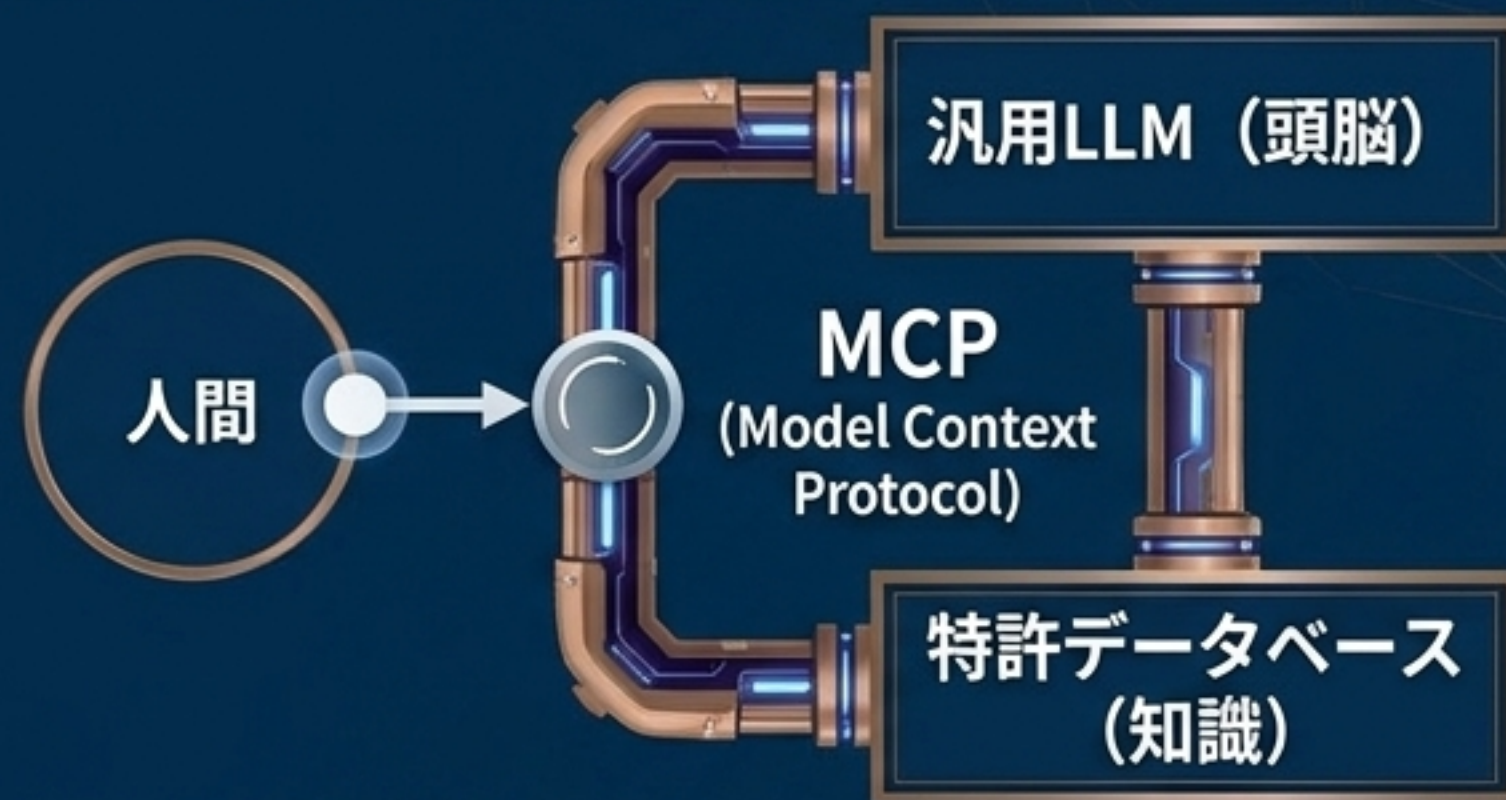
基盤の変化：MCPによる直結と標準化

2025年：分断されたワークフロー



人間が「汎用LLM (頭脳)」と「特許データベース (知識)」の間を手作業で往復。

2026年：統合された対話型システム

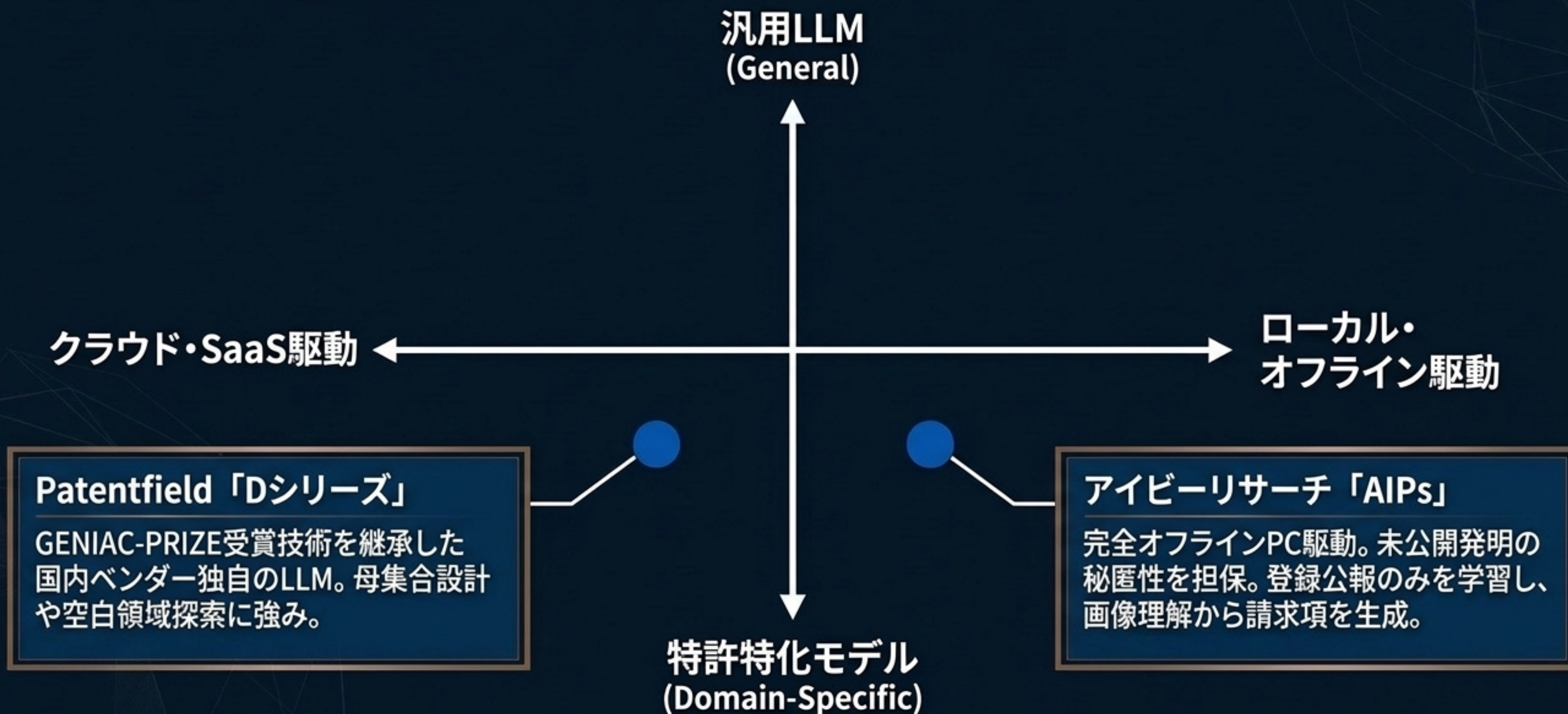


MCP (Model Context Protocol) が LLMと特許DBを太いパイプで直結。

プレイヤー動向：サマリア、AI Samurai、Patsnapが同時期にMCP対応を発表。調査、発想、クレーム化、評価の往復作業が一つのチャットUI内で完結可能に。

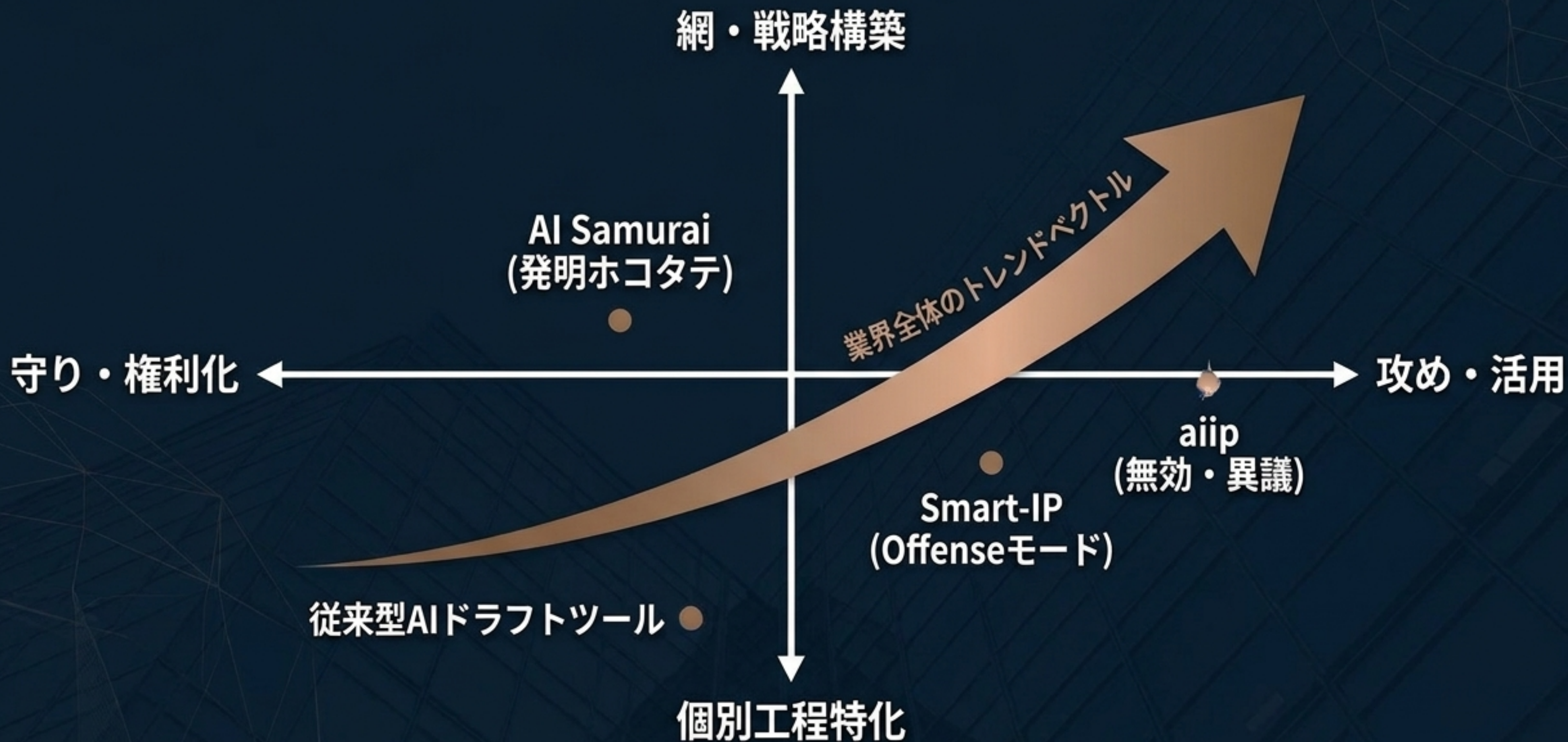
特許特化型基盤モデルの台頭

汎用AIの活用に加え、特許領域に特化した独自の基盤モデルが登場。



2026年 注目プレイヤー・ランドスケープ

プレイヤーはそれぞれ異なるアプローチを取りながら、戦略×攻めの領域へ急速に進化している



Synthesis: 次世代の知財戦略ループ

分断されていたツール群は、一つの自律的な「知財戦略サイクル」に統合されつつある

① 網の設計・生成 (Design)

AI Samurai等（基本特許からの
周辺網自動生成）

② 権利化・秘匿 (Secure)

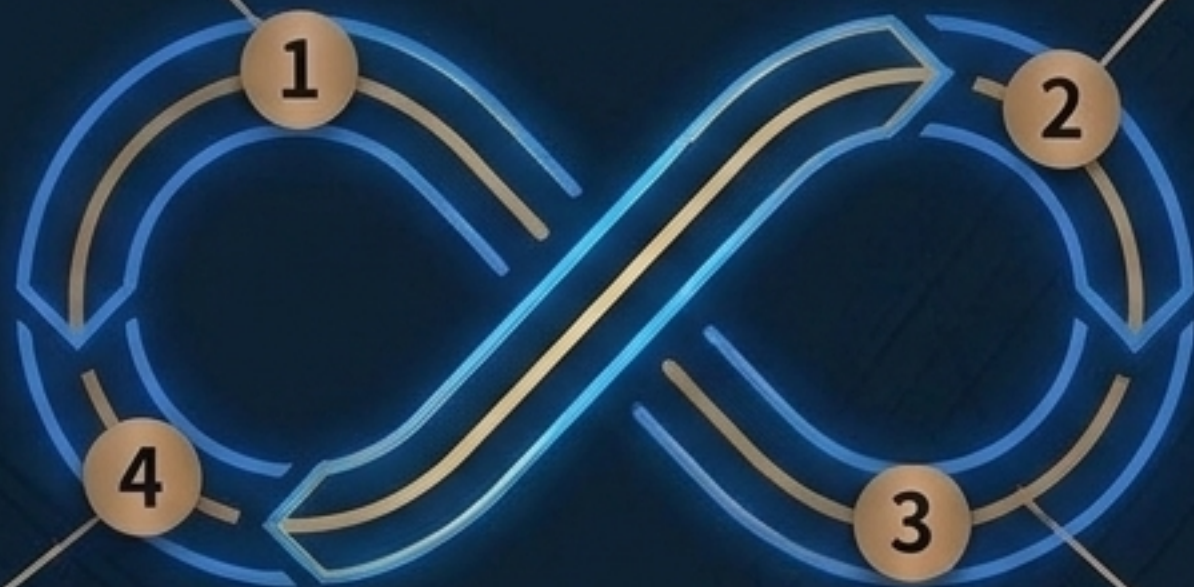
アイビーリサーチ等（ローカル
LLMによる安全な明細書作成）

④ 牽制・網の補修 (Attack & Refine)

aiip等（情報提供・無効審判による
他社牽制とフェーズ1への還流）

③ 製品対比・評価 (Evaluate)

Smart-IP等（イ号対比AIによる
自社特許の実効性検証）



結論：個別ツールの導入フェーズは終了。自社の目的に合わせ、これらの機能を組み込んだ「AI知財パイプライン」をどう設計するかが問われる。

The Reality Check: 人間の役割の再定義 (Human-in-the-loop)

AIが高度化するほど、知財部員による緻密な統制と検証が重要になる



- **生成物はいくまで「案」**
事業戦略との整合性、先行技術との関係性、クレームの法的な質の検証は、依然として「人」の不可欠な役割である。
- **ベンダー主張のファクトチェック**
会期直前の広告表示を巡る訴訟リスクが示す通り、ベンダーの「数値訴求」を冷静に見極め、自社環境で実機検証する眼が必要。
- **組織としての自走化・内製化**
AIをブラックボックスとして使わず、知財部門自身がAIを統制・評価・改善する「自走化 (AIDAO等)」の価値が高まっている。

Strategic Imperatives: 今後の知財部門への提言

01

「点」から「面」へのシフト

自社の知財プロセスにおいて、単一タスクの「自動化」で満足せず、特許群による「網の設計」にAIをどう組み込むか？

02

Offense型ツールチェーンの構築

防衛・出願にとどまらず、他社製品の牽制・権利活用（Offense）のためのAI基盤をどう構築し、事業部へフィードバックするか？

03

AI時代における「問いを立てる力」

LLMと特許DBが直結し作業の往復が消滅する時代において、「AIに適切な指示を与え、事業価値を定義する力」をどう育成するか？

知財は「守る」時代から、AIを駆使して「活かす・創る」時代へ。